

Study Tour Report

中国・韓国編



中国スタディツアー ～多角的な視点で物事を捉える～

私たち比較文化学科の学生8人は3人の引率の先生と共に、9月4日から10日の1週間、中国の北京に行き、そこで多くのことを体験しました。

日本と中国は隣国でありながら、食文化・マナー・キャンパスライフ・交通マナーといった、習俗のほとんどが異なり、最初はとまどうばかりでしたが、誰ひとり怪我などなく、無事に全ての行程を終えることが出来ました。



天壇での地書
大内先生がスポンジ製の筆で「日中友好」を書す

全く見知らぬ地に身を置いたことで改めて「日本」について、「日中問題」について真剣に考えるようになったのではないかと思います。

また、物事を偏った視点で認識したり、狭いコミュニティの中でだけ過ごしたりすることはとてももったいないことです。外に出て様々な経験をし、考える。これこそが比較文化なのだと感じました。

(文：遠藤 真琴)



明の十三陵にて
明代の十三人の皇帝の墓がある

テレビなどで、私たちは毎日のように“反日”“反中”的な報道を見聞きします。

しかし、私たちが出会った中国の人々は素敵な人たちばかりでした。路地裏のペットショップのおばさん、食べ物屋のお兄さん、公園で芸を披露するおじいさん……。



夜の天安門 天安門の前でポーズをとる二人

北京研修記 ①

万里の長城

落合 優美



長城入口にて。登山前の元気な一行



長城の「男坂」

中国スタディツアーの4日目である9月7日に、私たちは万里の長城を訪れました。雨続きだった北京でしたが、この日は快晴！！万里の長城を登るにはもってこいの日でした！

古代中国の歴史を象徴する万里の長城は、もともと春秋時代に斉(せい)・燕(えん)・趙(ちょう)・魏(ぎ)などの諸国が国境に築き、さらに秦の始皇帝が外敵や異民族の侵入を防ぐために増改築させたことに由来しています。しかし、今の長城とは別の場所に造られました。今の長城は明代に建造されたものです。1987年には、その芸術的価値と歴史上の重要性などが認められ、世界遺産に登録されました。

日本では北側の長城を「女坂」、南側の長城を「男坂」と称しています。比較的、女坂の方が登りやすいと言われていますが、坂が急で階段の段差も高く、とても大変でした。しかしその疲労を上回るくらい景色がとても綺麗で、ダッシュで登る生徒もいれば、延々と動画を撮っている生徒もいました。登りきったときの達成感は格別です！ぜひもう一度行ってみたいです。

北京第二外国語大学

原田 夏帆

スタディツアーの5日目、私たちは北京市の朝陽区に位置する北京第二外国語大学を訪れた。この大学は1964年に周恩来総理の強い意向のもと開設されたそうで、キャンパス内には、周恩来の銅像があり、その周りに花束が手向けられていたのが印象的だった。4日目に、北京大学を訪れたときにも感じたが、中国の大学は日本とは比べ物にならないほど広大な面積があり、どこを歩いているのかわからなくなるほどだった。

今回私たちは、日本語学部で日本語を学んでいる学生たちと交流した。中国の学生たちの日本語が流暢で驚嘆した。中国の学生向けに日本の大学生がどのような1日を過ごしているのかということと、沖縄の文化やご当地のゆるキャラについて二つのグループに分かれ発表した。ゆるキャラを知っている学生が多くいたことに驚いた。特にふなっしーの認知度が高かったのは印象的だった。中国の学生たちは、そうしたゆるキャラやアニメや漫画に興味がある、ということが伝わってきた。こうした文化面での交流が明るい日中関係を築いていく第一歩になれば良いと感じた。



北京第二外国語大学の正門前



中国の大学生へ日本の紹介を行った

北京研修記 ②

抗日戦争紀念館

落合 優美

中国人民抗日戦争紀念館は中国人民の抗日戦争の歴史を全面的に反映した大型総合的特別テーマ紀念館です。紀念館には、1931年の「九一八事変」（満州事変）から1945年の抗戦勝利にかけての14年間の貴重な歴史資料と写真約5,000点が展示されています。

私たちはこのツアーの3日目である9月6日にこの場所を訪れ、抗日戦争について学びました。従軍慰安婦や南京大虐殺の当時の様子を撮影した写真、731部隊による生体実験など、すべての展示物が衝撃的で、それは目を覆いたくなるものばかりでした。抗日戦争はどのようなものか、また、日本軍がどのようなことを行っていたのか、一目でわかる場所だと思います。

日中関係が悪化しているなかで、その要因の



抗日戦争紀念館前で

一つである「歴史認識」のすれ違いは、お互いが相手国を知ろうという意思を持ち、知るために自ら行動を起こすことで解決へと一歩近づけるのではないのでしょうか。

私たちはこの場所を訪れたことによって、日中の歴史に真正面から向き合えたような気がします。

盧溝橋

三留 也実

9月6日に見学した「盧溝橋」は、「中国人民抗日紀念館」と同様、日中の現代史にかかわる大変重要な舞台であり、私たちは緊張感をもって見学を行った。



今も残る砲弾の痕

「盧溝橋」は1937年7月7日に起きた日本軍と、中国国民革命軍との軍事衝突事件、通称「盧溝橋事件」（中国では七七事変と称する）の現場であり、日中戦争の発端となった歴史的な場所である。欄干や近くの城壁には当時の戦争の弾痕のようなものもあり、戦争の名残りを感じさせられた。

橋の全長は約260m、幅は約7.5mで構成されており、欄干の上には501体もの獅子の石像が立ち並んでいる。1つとして同じ姿形のものはなく、またその膨大な獅子の数は圧巻だった。橋から見渡す景色も広大で、マルコ・ポーロや清の乾隆帝など様々な偉人も絶賛している。

今回のツアーでは「盧溝橋」をはじめとする日中の歴史に関係のある場所を多く見学することができ当時の日中関係、とりわけ戦争の悲惨さを肌で感じる事ができた。教科書だけの知識を鵜呑みにするのではなく、実際に自分自身でその土地を訪れフィールドワークすることの大切さを学んだ。



マルコポーロの歩いた橋

北京研修記 ～特別編～

万巻の書物を読み、 万里の路を行く

鄧 捷

北京は遠くなかった。羽田を朝8時に飛び立ち昼前にもう着いた。文字通り「秋高气爽」(秋の空が高く空気が爽やかだ)の9月上旬の北京。故宮の雨の後に、万里の長城で見上げた青空が果てしなく広がっていた。北京の人々は親切だった。天壇公園でお年寄りが羽根蹴りを教え、手製の大きな筆で地面に「中日友好」を書いてくれた。バスや地下鉄の中で年配の先生は何度も席を譲られた。何より、交流校の北京第二外国語大学日本語学院の先生と学生が温かく迎えてくれて、充実した交流が行われた。このほか、記憶に残るのは、老舎記念館の柿の木、魯迅博物館の愛嬌たっぷりの猫、南羅鼓巷の洒落た髪飾り、明十三陵の重い石碑を背負う「鰲(おのがめ)」、西太后が光緒帝を幽閉した頤和園の玉瀾堂、北京大学の未名湖とエドガースノーの墓、第二外国語大学の周恩来の銅像、抗日戦争記念館に研修にやって来た新人警察たちのあどけない顔、盧溝橋の城壁に残る弾痕……。

料理も美味しかった。北京ダック、東来順の羊肉のしゃぶしゃぶ、四川料理、潮州(広東)料理……。清の乾隆帝が絶賛した老舗「都一处」のシューマイは、きっと横浜「崎陽軒」のシューマイイメージを覆しただろう。北京で中華料理を食べるのは、横浜中華街でのそれと違い、日々変化しつつある中国の今の色、香り、味を味わうことだ。

中国スタディツアーに参加した学生の皆は、大学の授業やメディアを通して学んだ中国とは大きく異なる「今」の中国を体験したと思う。驚きや喜びがあり、戸惑いや理不尽な思いもあったかもしれない。しかし、今までにない、中国を見つめる新たな視点を手に入れたに違いない。中国では「万巻の書物を読み、万里の路を行く」という諺がある。書物で知識を得るだけではなく、遠くへ飛びだしてはじめて自分の限界を超える多様な視点を獲得することができる。横浜の「崎陽軒」だけで満足せずに北京の「都一处」も味わおう、そしてその上に立って「崎陽軒」シューマイの必然性と美味を語ろう。

北京の天壇

菅野 恵美

天壇とは中国の皇帝が天を祀る儀式を行った基壇です。今は周囲も含めて公園となっています。天は円く地は四角いという思想の下、皇帝は円い基壇が重なった、更に中央の円い小さな石の上に立ち、天を祀りました。この場所は皇帝のみが立つことを許された場所です。それを知って知らずか、大勢の参観者が小さな石に立つために行列を成していました。チベット族のお婆さんが人一倍念入りに拜んでいて、まるで儀式のようです。

今回は皇帝の力、否、国家の力を思い知りました。私たちが天壇公園を訪れたのは、大閱兵の式典後の晴天の日です。中国政府は70周年の式典のため、北京周辺の工場の操業を停止させ、清浄な空気、とびっきりの青い空を準備しました。そのおこぼれを私たちは存分に享受したのです。しかし同時にとぼっちりも受けました。政府の要人が見学しているとのことで、当初は入れないと言われましたし、別の日には、要人が通るとのことで永遠に変わらなそうな信号機に足止めされました。



天壇の祈念殿の前で



天壇の中央の丸い石に立つために並ぶ人々



南羅鼓巷にて。髪飾りを付け、頭に花が咲いた三人

韓国スタディツアー

～日本の植民地統治の跡を辿る～

この比較文化学科は、「異文化理解」と「共生」のふたつを理念とし、他国の文化を理解することを目的としています。2015年2月8日から13日の6日間、そのふたつの理念をより深く学ぶために韓国・ソウルでの研修が行われました。訪問先は、元従軍慰安婦のおばあさんたちが現在共同で生活しているナムムの家や韓国の五大宮殿のひとつである景福宮、今日でも問題となっている独島記念館など韓国の文化や歴史に直接触れることで、異文化理解に努めました。私たちが訪れた時には、昨年4月に起こったセウル号沈没事件に対する抗議が、韓国のメインストリートともいえる世宗路で行われていました（写真左下）。さらに、独立宣言文が読まれたパゴダ公園を訪れ、独立の歴史を刻んだレリーフ数十枚を見ながら、日韓の歴史について深く考察しました。



光化門広場のセウル号事件の抗議の様子



景福宮の中



李舜臣の銅像



パゴダ公園

韓国研修記 ①

私たちにとって、いちばん印象深かったのはナヌムの家でした。出発前から多くの関心を寄せていた元従軍慰安婦だったハルモニ（おばあさん）たちの暮らすナヌムの家に訪れた時、私たちは自分たちの勉強不足を痛感しました。ハルモニたちに会う直前までは、自分たちの疑問を素直に質問しようという気持ちと、過去の出来事といえども加害者である私たち日本人を快く迎えてくれるのだろうかという不安が入り混じっていました。

日韓間の関係悪化は、従軍慰安婦問題を筆頭に歴史教科書問題や竹島（独島）領有権問題など様々あり、ハルモニたちも情勢と同じく今の日本を良く思っていないのではないだろうかと考えていました。しかし、実際にハルモニたちを目の前にすると、とても明るく気さくな方ばかりで、遠いところからよく来てくれたね、と私たち日本人をあたたかく迎えてくださいました。

そんな明るく元気なハルモニたちが当時の話を始めると真剣な面持ちになり、自らの経験を語ってくれました。戦争の恐ろしさ、現在の日本、私たちの青春を返してほしいという悲痛な思いが私たちの心を強く縛りました。どんなに明るく振る舞っていても、当時の傷が癒えることは一生ないのだということを感じました。

毎週水曜日にソウルの日本大使館前で行われている水曜デモにも参加し、今もなお問題解決に尽力しているハルモニたちに会い話を聞いたことで、私たちの従軍慰安婦への考え方や日韓関係についてまた別の視点から考察できるようになりました。



日本大使館前に置かれている少女の像



ナヌムの家



ナヌムの家にて話を聞いている様子



水曜デモの様子



戦争と女性の人権博物館

韓国研修記 ②

そして、今回のプログラムで関東学院大学と協定を結んでいるハンシン（韓信）大学との交流会も行われました。この交流会では、日韓の学生同士で現在の日韓間に存在している政治問題や異文化理解に努めました。初めは、お互いに緊張した面持ちでグループディスカッションをしていましたが、次第に緊張もほぐれ学生の視点での問題の考察や解決策などをそれぞれ意見しあうことができました。この交流会で、韓国の学生とともに将来の日韓関係について考えることができ、今後の課題について考えを共有できる貴重な場となりました。また、政治問題や日韓関係改善の話題だけでなく、両国の文化について質問しあったり、現在の日本や韓国で流行している事柄など学生ならではの話題で盛り上がる場面もありました。

交流会の夜には、懇親会も兼ねてハンシン大学の学生たちと共に大学近くの食堂へ足を運びました。そこでは、日本の韓国料理屋とは打って変わり、現地韓国ならではの料理やお酒の飲み方など食の文化にも深く知ることができました。ハンシン大学の学生の皆さんは、気軽に談笑できたり、日韓の歴史について私たちの知らないことを積極的に教えてくれました。座学だけでは味わえない韓国の歴史や文化に触れ、ますます韓国について知りたくなりました。



ハンシン大学の学生との懇親会



ハンシン大学の教員、学生との記念写真



グループごとの交流会

日本の植民地統治に関する建造物を多く見て回った中で、西大門（ソデムン）刑務所は特に印象に残っています。日本の植民地統治時代に建てられた刑務所を、そのまま残しており、監獄や死刑台も当時のままでした。刑務所の中には当時収監されていた方々の写真が何百枚も壁に貼られていたり、蝨人形を使って当時の様子を詳しく再現していました。それを見て、日韓の深い歴史を目の当たりにし、私たち学生も考えさせられるものが多くありました。



西大門刑務所

韓国研修記 ③

このスタディツアーを通じ、参加する前と参加した後では日韓関係の考察の仕方が大きく変化したと思います。私たち自身の韓国へのイメージの変化や現在も問題となっている政治問題などを歴史建造物や博物館、当時を生きの方たちに直接お会いできたことで、座学だけでは学べない点をたくさん学ぶことができました。日韓間の政治問題は、歴史認識をはじめとして多く存在しています。この経験によって、日本と韓国や東アジアの国の間に存在している問題や課題についてより深く理解していきたいと思えるようになり、今後の講義やゼミナールに生かして韓国だけでなく東アジア地域について学んでいこうと思えるツアーでした。



独立宣言文が刻まれている石碑



独立門（日清戦争の結果、清のもとを離れて近代国家として独立したことを記念した門）

短い時間の中でしたが、納得のいくものになったと思います。そして、先生方や印刷会社の方々との協力でとても良い冊子になりました。ありがとうございました。私はスタディツアーに参加して、そこでしか感じられないことを多く経験することができ、貴重なツアーになったと思います。皆さんがこの冊子を読んで少しでもスタディツアーに参加したいと思ってもらえたら嬉しいです。

韓国担当：木村瑛美



独立記念館

今回の韓国スタディツアーは、経済学部の林博史ゼミナールと合同で行いました。比較文化学科からは教員2名と学生5名が参加しました。日韓の歴史問題を現地ソウルで実際に見聞する中で考え、また韓信大学の学生との交流で若い世代の明日をも考えるスタディツアーでもありました。

韓国スタディツアー、次のステップは〈継続〉と〈交流〉です。つまり続けることが大切だと考えます。〈継続〉して積み重ねる。考えてみてください。思い出したように押しかけたのでは、韓信大学の皆さんも、よい印象は持たないはず。〈継続〉し回数を重ねてこそ絆を結ぶことができ、またその絆も太く強くなる。次に、絆を太く強いものにするためには〈交流〉も必要です。

今回、韓国を訪れた私たちは、韓信大学の皆さんに、心底お世話になりました。特に学生の皆さんの活躍には目を見張るばかり。何より心のこもった対応に感激しました。でも、ここで満足したのでは〈交流〉は道半ば。一方通行では〈交流〉になりません。次は是非とも韓信大学の皆さんに関東学院大学を訪ねていただきたいと願っています。

（担当教員：大内憲昭、井上和人）

今回のパンフレットを作るにあたり、文の構成や写真の選別・レイアウトなど様々な面で苦労しましたが、先生や印刷所の方々のお力添えで素敵なパンフレットが出来上がりました。ありがとうございました。制作の過程で、1週間の中国での体験が思い出されました。

このパンフレットはオープンキャンパスなどで配布されるのですが、これを見て少しでも比較文化学科・スタディツアーに興味を持つ受験生が増えれば嬉しいです。

中国担当：遠藤真琴

比較文化学科＜中国・韓国スタディツアー報告＞

2015年11月20日発行

編集：関東学院大学国際文化学部比較文化学科

編集員：原田夏帆、遠藤真琴、三留也実、落合優美（中国担当）／三澤美紗子、木村瑛美、鈴木康平（韓国担当）

〒236-5802 横浜市金沢区釜利谷南 3-22-1 Tel: 045(786)7179 URL: <http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp>

印刷所：株式会社なまためプリント 〒231-0006 横浜市中区南仲通 4-43 馬車道大津ビル TEL: 045(641)8080